

いのちをつなぐ水と流域・地球市民対話プロジェクト

「AICHI 活動方針 2023 (AICHI Action Policy 2023)」

「いのちをつなぐ水と流域・地球市民対話プロジェクト」は、水をサステナビリティの根源ととらえ、水に関わるさまざまな課題をあきらかにして、持続可能な社会づくりをめざします。

伊勢湾と三河湾を包み込む東海地域の伊勢・三河湾流域圏には、木曽の森のヒノキ、長良川のアユ、六条潟のアサリをはじめ、古くから私たちの暮らしを支えてきた森里川海の豊かな自然の恵みがあります。

しかし、近代化とともに工業化や都市化が進み、利便性の高い暮らしを手に入れた一方で、自然の摂理に謙虚に学ぶ姿勢や自然への畏れを忘れ、流域の上下流は分断され、森林の荒廃や森林資源の放棄、川環境の劣化、海洋資源の減少などの課題を抱えるようになりました。21 世紀に入り、東海・中部地域では、2005 年日本国際博覧会（愛・地球博）、2010 年の生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）、2014 年の ESD ユネスコ世界会議を経て、各分野で課題解決に向けた取組みが展開されてきました。私たちはこれまでに何を成し得て、何が残された課題なのでしょう。

2023 年 2 月 23 日、私たちは、水と流域・地球市民対話プロジェクト「地域対話フォーラム 2023 in Aichi」に集い、水に関わるサステナビリティのテーマを「水と環境」、「水と生業」、「水と文化」の 3 つに分けて、さらにこれらを横断的に考察する「SDGs のパートナーシップ」の観点から以下の議論を行いました。

「水と環境」のテーマでは、水に対する関心の低さ、水供給の仕組みの不効率、気候変動による水害リスクの増大、流域治水対策のメニュー不足、不利益配分問題、親子間・世代間・行政と市民の間の連携の欠如、浸透や湧水を含めた流域における水と物質の循環の理解不足、川から海に流入するごみ問題などの課題が提示されました。それらの解決に向けて、行政、大学、市民の流域治水に関する問題共有と解決に向けた教育や活動、日本固有の技術から AI 等の先端技術にいたるまで多様な方法を活用して適切な水供給や水循環に戻す・促進する・広げる活動、身近な指標（例えば鮎）を中心に据えた市民（漁師など）を巻き込んだ利水・治水・水環境の包括的な課題解決、森林土壌の健全化による保水力向上と海底湧水増加策の検討、海ごみ削減活動などの取組みが各地で進められています。今後は、自然の摂理を再認識し、“自分ごと”としての川への想いを共有し、「流域市民」の考え方を尊重しながら他分野との連携を進めていきます。

「水と生業」のテーマでは、火山や森から流れ出る水の落差が大きく距離が短い日本の河川において、歴史的に維持されてきた上流と下流の豊かな交流が分断されている状況が指摘されました。上流の森林荒廃、中流の持続不可能な農業、下流から海に流れる農業用プラスチックごみ等の海洋ごみ問題、さらには、水と時間の流れを意識した教育の不足などの課題が提示されました。それらの解決に向けて、水と自然の恵みの理解促進や次世代への継承活動、森と流域木材の有効活用や伝統知の活用、生き物と共生する有機農業の推進、公害経験地におけるアサリ再生、食文化・美食文化の成立の根源理解とシビックプライドの醸成、脱酸素・即戦力育成や水素社会の実現に向けた取組み、現世代が次世代を育てる努力など、上中下流から海までのつながりを意識した活動が進められています。今後は、世代と地域を超えた交流や多様な主体の連携、日本の独自性と各地域の独自性の理解、日本文化が内包する豊かさを世界に発信する重要性などを尊重しながら他分野との連携を進めていきます。

「水と文化」のテーマでは、利便性の追求による環境破壊や生物多様性の減少、人と自然の関係の希薄化による地域文化の多様性への無関心、伝統的な祭りに用いる自然資源の減少や劣化、流域圏単位で課題解決をめざす地域政策の不足、国際的な情報発信や連携不足などの課題が提示されました。それらの解決に向けて、産官学民の協働による河川浄化や親水活動、ため池の水質や植物の調査、河川流域文化や流域を縦断・横断する街道文化

の掘り起こしによる観光、伝統知の継承や流域圏内の祭りを対象とした生物文化多様性の学び、流域圏の持続可能性を高める政策立案能力の育成、流域思考の循環経済まちづくり、水と災害に関する国際会議開催などの取組みが進められています。今後は、日本で育んで来た河川流域の文化と伝統の世界への発信、伝統知に学びながら科学の知恵をも活かす課題解決アプローチ、100年後を見据えた取組みと、一人一人が主役となって川と自分の物語をつくる姿勢などを尊重しながら、他分野との連携を進めていきます。

「SDGs のパートナーシップ」のテーマでは、身近な環境の可視化不足、異分野間・世代間の情報格差、グローバル・ローカル活動の方向性のズレなどの課題が提示されました。それらの解決に向けて、流域圏で取り組む ESD（持続可能な開発のための教育）の活動や SDGs の指標研究、GIS（地理情報システム）による課題の可視化、アフリカ諸国をはじめとする世界の開発途上国との国際連携や国際支援、ESD のグローバルな地域間ネットワークなどのより大きなプラットフォームの形成によるムーブメントの創出、グローバルとローカルな取組みの相乗効果の創造などの取組みが進められています。今後は、世界各地の自然環境と文化の多様性の尊重による相互理解、課題共有とパートナーシップによる活動価値の最大化、大阪・関西万博での発信をめざす国内・国際ネットワークの強化などにより、地球市民としての対話を促進することで、さまざまな分断を生む境界線を溶かし、分野横断的な連携を進めていきます。

上記の議論を経て、上記の議論を経て、私たちは「いのちの物語」を考えるきっかけを得ました。人と自然（nature）を分けるのではなく、一体のものとしての「自然（じねん）」の考え方に基づいて、流域圏で共有できる「いのちの物語」の探究を始めます。また、異なるテーマの諸課題を包括的に理解し、SDGs のパートナーシップによる横断的な連携を進めることの重要性を確認しました。そのために、以下の行動を重視し、活動を推進します。

1. 課題解決のアプローチ：水問題を、「水と環境」、「水と生業」、「水と文化」の3つに分け、さらに「SDGs のパートナーシップ」による横断的取組みにより、流域圏における水に関わる諸課題の解決と地域の持続可能性向上の方策を検討します。

2. 課題と資源の可視化と共有：流域圏内のさまざまな課題を可視化して、あらゆる関係者間で共有するとともに、豊かで多様な地域資源をあきらかにして、流域圏内の住民間での共有を促進し、それらの保全と循環利用を促進する方策を検討します。

3. 分断のつなぎなおし：水に関わるあらゆる専門性を超えた活動の連携をめざし、流域圏内の環境・社会・経済的課題の境界を越えて文化の力によって再統合し、生き物の内なる水と外界の水のつながりやグローバルとローカルのつながりを意識した SDGs のパートナーシップで包括的に課題を解決する方策を検討します。

2025 年の大阪・関西万博に向けたこれからの 3 年間で、上記の活動方針のもと、いのちをつなぐ水と流域の議論を進め、ワクワクする未来社会に向けた地球市民対話を開始します。

2023 年 2 月 23 日

いのちをつなぐ水と流域・地球市民対話プロジェクト

「地域対話フォーラム 2023 in Aichi」参加者一同